

「日本は壊れかけている」
倫理研究所の新年度の事業方針は、こんなシヨッキングな言葉で始まります。
「政治・経済・環境・教育・文化等々、諸領域の悪化に歯止めをかけ、創造的な再生を図らなければ、我が国の未来はない。国民の健全な精神性と生活の拠り所となる道義の確立こそがすべてに優先する。そのため、倫理運動が担う役割はきわめて大きい」と謳っています。

全国の倫理法人会は、この方針を受け、「企業に倫理を、職場に心を、家庭に愛を」を合言葉に、現在六万五千社の倫友が全国十万人社達成に向け、活力に満ちた実践・普及活動を推進することを主眼に、新年度の活動をスタートさせました。

そこで改めて、経営者にとつての「倫理普及」という実践が、自身の生活の中でどのような意味を持っているかについて考えてみたいと思います。

今日多くの経営者が、企業の舵取り役として大きな責任を負い、生き残るために悩み苦しんでいます。倫理法人会員のU社長もその一人でした。工務店を経営する氏は、昨年の今頃から年末にかけて、借金苦を生命保険金で清算しようとしてまで追い詰められました。

そんな折、倫理経営インストラクターから墓参の実践を勧められ、徹底的に取り組みました。それは現在までも毎日続けられています。氏は次第に、経営者としての責任や気力を取り戻し、絶望感を払拭するこ

真摯な倫理普及が 経営活動に生きる



とができました。同時に「倫理の確かさ・正しさ」を確信することにもなったのです。
その信念は、U社長を倫理普及へと駆り立て、「自分と同じように苦しんでいる人にはもちろん、できる限り多くの経営者に純粋倫理を学び、実践するチャンスを与えてあげたい」という思いで、真剣に普及に飛び回りました。まさに「利他の働き」そのものでした。

この無心・無垢な実践が、奇跡的な結果を生んだのです。昨年末には一億円の融資が受けられ、年が明けてからは、不思議と受注が増え続けていきました。

このケースは、ややもすると自社の儲けのみに囚われがちな経営者が、利他の働きによつて知らず知らずのうちに真の人間力や経営力を身につけられるようになった流れを、私たちに教えてくれます。

一方で倫理普及という行動には、企業活動と同様に、思わぬ苦痛や困難を伴う場合があります。相手の態度や言葉づかいによつては、プライドや面子を著しく傷つけられたり、熱烈な行動に反して数字として結果が出せないこともあります。

苦難にさらされるのが経営者の宿命であるならば、経営者として倫理普及での苦痛を嫌い、逃げ出してしまうようでは、「経営者失格」という烙印を押されてしまいます。そこで敢えて、倫理普及を自分磨きの「行」として、真摯に無欲至誠の境地を目指して取り組んでみるのが、経営者としての大切な実践の一つと言えるのです。

え・栗木 映